

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：82621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00167

研究課題名（和文）写真・映像の「影響」から見た日本の前衛芸術 昭和戦前期を中心に

研究課題名（英文）The "influence" of photography and cinema in Japanese avant-garde art

研究代表者

谷口 英理（Taniguchi, Eri）

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・研究員

研究者番号：40422513

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、昭和戦前期（1920年代末～40年代半ば）の前衛美術における写真・映像の「影響」を、具体的な作品や言説の事例調査を通じて解明することにある。特に本研究では、主に長谷川三郎、福沢一郎、瑛九の1930年代の活動に見られる写真・映像の「影響」を、具体的な作品や言説の調査、分析作業を通じて明らかにすることを目指した。また、その過程で、写真やフィルムなどのアーカイブズ資料の保存、整理、目録作成、デジタル化、研究資源化のための手法の検討なども行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の対象となった昭和戦前期は美術家たちが自らカメラを持ち、写真や映像を撮影し始めた最初期に当たっているが、その表現の実態は必ずしも明らかになっていない。本研究においては、特に長谷川三郎と福沢一郎のこの時期の写真表現の一端を、資料の調査、整理、およびデジタル化等を通じて明らかにすることができた。また、上記の調査過程で、同時期の他の前衛美術家の写真や映像についても、保存処置や整理を行うことで研究資源化する必要があるという認識に至り、その知見をシンポジウムやその報告を通じて研究者、学芸員等に情報共有することができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the influence of photography and film in the avant-garde art of the early Showa period (late 1920s to mid-1940s) through case studies of art works and discourses. In particular, this study attempts to clarify the influence of photography and film in the activities of Hasegawa Saburo, Fukuzawa Ichiro, and Q Ei in the 1930s, mainly through a research of specific works and discourses. In the process, we also studied methods for preserving, arranging, cataloging, digitizing, and making archival materials such as photographs and films into research resources.

研究分野：日本近代美術史

キーワード：前衛美術 日本近代美術 日本文化 情報資源 アーカイブズ 写真 映画 メディア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

西洋美術の受容と展開を跡づける西洋美術受容史的な観点とは、非欧米圏の近代以降の美術研究にとっては不可欠な観点である。しかし、日本近代の前衛美術に関する従来の研究においては、この観点があまりに特権化され過ぎてきたように思われる。それは、そもそも「日本の前衛美術」という枠組自体が、西洋の前衛美術動向と対応する日本の美術動向と規定されるものであったからかもしれない。西洋美術受容史的な観点に依拠した場合、作品や言説の研究は、西洋の前衛美術の動向が日本というローカルな場でいかに受容され、いかなる展開を見せたのかという問題設定において行われることになる。そして、このような問題設定を前提とする限りにおいては、どれほど「日本固有の文脈」を強調したとしても、日本の前衛美術は「西洋の前衛美術の傍流」と位置付けられるしかなく、したがって否応なく周縁化されてしまうという構造的なジレンマがある。

本研究の背景には、日本の前衛美術研究に上述のようなジレンマをもたらす西洋美術受容史的観点を相対化し、異なる観点を見出そうとする問題意識がある。そして本研究ではその異なる観点として同時代のメディア状況との関わりという観点を採用し、昭和戦前期（1920年代末～40年代半ば）の前衛美術の再検討を行うことにした。

大戦間の先進国においては、同時多発的かつグローバルな範囲でメディア・テクノロジーの進展と、およびそれがもたらすメディア環境の変容が起きた。日本でも、関東大震災（1923年）以後から1930年前後にかけて、大衆娯楽誌『キング』の創刊とラジオ放送開始（1925年）、新聞発行部数の飛躍的増大（1925年前後）、円本ブーム（1926年～30年頃）、電信の実用化（1928年）、ニュース映画の定期上映開始（1930年）といった情報技術の革新とそれがもたらす新たな事象が次々と生起し、1930年前後には現代のマスメディア社会の原型ともいえるべき社会が成立した。前衛美術家たちは、そのようにして現出した新たなメディア環境に対し、制作や方法論のレベルでいち早く反応したと思われる。たとえば、古賀春江等1930年前後に活躍した前衛美術家たちは、当時の現代思想とも言うべき映画理論を摂取し、「モンタージュ」や「編集」に基づく絵画を発表した。また、1930年代後半になると、瑛九、長谷川三郎、吉原治良、福沢一郎、阿部展也（芳文）といった多くの前衛美術家たちが、写真や映像等の新たなメディアに関心を持ち、表現手段や制作のための構造モデルといったさまざまなかたちで活用するようになった。彼らの実践にはいずれも、個の「人格」に基づく大正教養派・白樺派的な創造概念から、美学者・中井正一の言う「集団」に基づく創造概念へのパラダイム転換が認められるように思う。

以上を踏まえ本研究では、同時代のメディア状況との関わりという観点、とりわけ当時の新興メディアだった写真・映像がもたらした「影響」に焦点を当てて、昭和戦前期（1920年代末～40年代半ば）の前衛美術の再検討を行うことにした。同時代のメディア状況へのとの関わりという観点に依拠することにより日本の前衛美術は、「日本のシュルレアリスム」「日本の抽象絵画」といった西洋美術受容史的な把握とは異なる仕方では捉え直され、その美術史上の位置づけの見直しにもつながると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、昭和戦前期（1920年代末～40年代半ば）の前衛美術における写真・映像の「影響」を、具体的な作品や言説の事例調査を通じて解明することにある。特に本研究では、主に長谷川三郎、福沢一郎、瑛九の1930年代の活動に見られる写真・映像の「影響」を、具体的な作品や言説の調査、分析作業を通じて明らかにすることを目指した。また、昭和戦前期は美術家たちが自らの表現に写真や映像を積極的に取り入れ始めた最初の時代であるため、彼らが残した資料には、フィルムや紙焼きなどが少なからず含まれており、保存上の問題が生じている場合も多い。本研究では、調査を実施した長谷川、福沢のアーカイブズ資料に関して、特にそこに含まれる写真資料の保全を行い、デジタル化や目録作成を通じて研究資源化する方法についての検討も行った。

3. 研究の方法

「『思想』再刊号の領域横断的言説圏の実態解明」、「前衛美術家による写真表現の実態解明」、「造形作品における写真・映像の「影響」の実態解明」の3つのテーマに沿って研究を進めた。各テーマにおいてはそれぞれ、以下のような対象と方法を採用した。

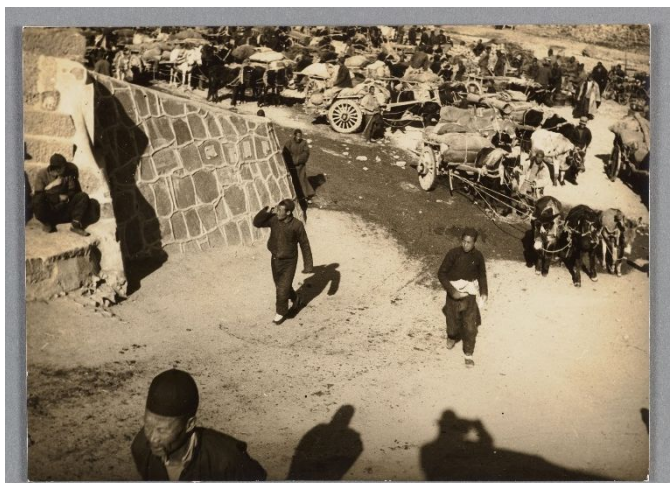
に関しては、メディア環境の大変動があった1930年前後の前衛美術をめぐる言説状況を、1929年4月に再刊された『思想』誌（岩波書店）の言説圏にあると考えられる写真雑誌を中心に、調査した。再刊号以降の『思想』では、板垣鷹穂、中井正一、清水光、伊奈信夫といった新進の執筆陣が、新たなメディア状況と芸術・文化の関わりを領域横断的にとりあげた議論を展開し、同時代の文化・芸術に多大な影響をもたらした。その言説圏は、写真雑誌、美術雑誌、映画雑誌などにも広がっている。本研究では、再刊後の『思想』を軸としながら、その言説圏にある『光画』をはじめとした写真雑誌の言説を中心に、写真・映画理論が一種の現代思想と捉えられていた状況を具体的に明らかにした。

と は並行して進めることとし、前衛美術家が1930年代～40年代に手掛けた写真表現につ

いて、未発表プリントやネガ、雑誌で発表された誌面構成等を含めた調査の実施、外部の研究者との意見交換等を行った。研究期間の大部分において新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けたため、本研究においては、当初予定よりも研究対象を絞り、特に学校法人甲南学園が所蔵する長谷川三郎の写真資料、および福沢記念館が所蔵する福沢一郎の写真資料の調査研究をメインに実施した。第一に甲南学園長谷川三郎記念ギャラリーの協力を得て、同学園が所蔵する長谷川三郎の未発表プリントのデジタル化を行うことでその全容を把握し、特に満蒙旅行のスナップショットを対象に被写体特定を進めた。第二に福沢一郎記念館の協力を得て、未発表のものを含むオリジナル・プリント、ネガの悉皆調査を行い、保存と全容把握のためのデジタル化を行った。また、長谷川三郎、福沢一郎の資料の双方について劣化の恐れがあったため、適切な保存包材へのリハウジング作業等の保存処置を実施し、加えて同様の資料を所蔵している関係者や外部の研究者たちと、これらの資料を研究資源として活用可能するための方法を検討する研究会やシンポジウム等を実施した。

4. 研究成果

1930年代は、美術家たちが自らカメラを持ち、写真を撮影し始めた最初の時期だが、その実態は必ずしも明らかになっていない。昭和戦前期（1920年代末～40年代半ば）の前衛美術における写真・映像の「影響」を具体的な作品や言説の事例調査を通じて解明するという本研究の目的を遂行するにあたり、調査対象とすべき前衛美術家たちの写真や映像が、研究資源として活用可能になっていないという状況が大きな課題となった。そのため本研究においては、まず前衛美術家たちの写真や映像を活用可能にするところから研究を着手する必要がある、特に長谷川三郎、福沢一郎の写真資料の保存処置と整理、保存・研究のためにデジタル化、目録作成（データベース化含む）を進めた。特に長谷川に関しては、現存が確認されている大半のプリントをデジタル化できたことが大きな成果と言える。特にその中の満蒙旅行（1938年）の写真とスクラップに関して被写体特定を進めたことよって、長谷川の旅程の一部が明らかになった。



図：長谷川三郎が満蒙旅行時に撮影したスナップ写真（1938年）

また、上記の過程で、長谷川や福沢以外の前衛美術家の写真や映像についても同様の研究資源化が必要だという認識に至った。そのため、2021年にオンラインによるシンポジウム「画家の写真資料 保存と情報共有の実際」（福沢記念館主催、伊藤佳之・谷口英理企画）を開催した。同シンポジウムにおいては、福沢一郎記念館の伊藤佳之氏による福沢の写真に関する報告、谷口による長谷川三郎の写真に関する報告に加え、東京国立近代美術館の長名大地氏による『抽象と幻想』展関連写真に関する報告、堀内カラーアーカイブサポートセンター所長の肥田康氏による、昨今の写真資料の危機に関する報告、および参加者との意見交換も実施した。本シンポジウムの内容は『福沢絵画研究所 R 通信』第2号（2021年5月）に掲載された。また、2022年には福沢一郎記念館が主催する「写真資料取扱ワークショップ」において基調報告「作家資料に含まれる写真資料の保存、研究資源化をめぐる課題」を行い、関係機関の学芸員、研究者に1930年代、40年代の写真資料の保存方法と研究資源化に関する情報共有を行った。

上記に加え、本研究では昭和戦前期（1920年代末～40年代半ば）の前衛美術における写真・映像の「影響」という観点から、長谷川三郎、瑛九、阿部展也、吉原治良等の作例の調査を実施し、また『光画』に代表される写真雑誌を対象に、言説の収集と分析を実施した。その成果の一部は、板橋区立美術館で開催された「さまよえる絵筆：東京・京都戦時下の前衛画家たち」展のカタログに寄稿した「長谷川三郎における 前衛 と 伝統 の接続 モダン・フォトグラフィ的視覚言語を經由した抽象表現」にまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 谷口英理	4. 巻 134
2. 論文標題 オノサト・トシノブと戦前期の前衛ネットワーク	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ガス燈 大川美術館ニュース	6. 最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口英理	4. 巻 2
2. 論文標題 長谷川三郎の写真資料	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福沢絵画研究所R通信	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 谷口英理
2. 発表標題 作家資料に含まれる写真資料の保存、研究資源化をめぐる課題
3. 学会等名 写真資料取扱ワークショップ（福沢一郎記念館主催）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷口英理
2. 発表標題 長谷川三郎の写真資料
3. 学会等名 シンポジウム「画家の写真資料 保存と情報共有の実際」
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 弘中 智子、清水 智世	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 さまよえる絵筆	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------